

はしがき

本論集は、2010年7月10日に北海道大学スラブ研究センターで開催された新学術領域研究の全体集会の記録です。今回の全体集会は、8～9月に本領域研究に対する中間評価が行われることから、「これまでの研究の集約と今後の研究の方向性」をテーマとして開催しました。基本的に各計画研究班の代表がこれまでの各班の研究成果と今後の研究の方向性について報告しました。討論者は、岡部達味氏（東京都立大学名誉教授）と小長谷有紀氏（国立民族学博物館）にお願いしました。痛いところも沢山突かれましたが、本領域研究の今後の発展につながるコメントをいただくことができました。また、人文科学系の研究と社会科学系の研究を今後統合していくために何をしなければならないかという大きな課題の展望も見えてきたように思いました。

この全体集会での議論を受けて、文科省に提出する中間評価のための報告書を作成しました。また、9月13日には、文科省で「科学研究費補助金における評価に関する委員会」のなかの「人文・社会系委員会」によるヒアリングが行われました。中間評価の結果は、A評価（研究領域の設定目的に照らして、期待どおりの進展が認められる）となりました。「中間評価に係る意見」は次のとおりでした。

本研究領域は、ロシア、中国、インドを現代の世界秩序に挑戦する「地域大国」と位置づけ、これらの国々の特殊性・固有性を探究するとともに、共通性を抽出し、さらにはそれを通じて世界システムの理解の深化を目指すものである。

その調査方法の一環として、地域研究者が専門外の地域に相互乗り入れを行っていることは注目に値する。これらの調査を通じて、学会誌レベルの論文も精力的に生産され、「帝国とその崩壊プロセスの比較」「地域経済統合」「内政比較」などの大きなテーマをめぐって、着実に研究成果が挙がっている。国内外の学会でセッションやラウンドテーブルを設置するなど、研究成果の公表についての積極的な姿勢も評価できる。公募研究も研究領域の特色を反映しており、計画研究と公募研究の連携もよくできていることも高く評価できる。

今後の研究を通じて、「世界システム」「文明圏」「帝国」などの大概念についてのさらなる検討と、個別の研究課題についての研究成果を統合する、より大きな議論や理論的枠組みの提示が期待される。なお、この研究領域で行われている、地域研究者の相互乗り入れについては、その方法を通じて具体的にどのような新しい発見が行われるのかということ、より方法的・体系的に明示してもらいたいという意見も出され、地域研究の方法論の再検討のための貢献も期待される。

また、大きな理論的枠組みの提示という課題に関しては、各研究グループを越えての大きな議論の場があまりつくられていないという意見があり、そのような議論の場がより多く設けられ、より大胆な理論化がなされることが期待される。

本領域研究は、後2年半続けられます。今回の全体集会での議論や上掲の「中間評価に係る意見」を踏まえて研究をさらに深めていきたいと考えております。

2010年10月22日

領域代表者 田畑伸一郎